美人姉妹のスカトロ調教
第2&3章
CG画像+ノベル
地の文、セリフ
あり・なしファイル
キンク文庫

第2章　浣腸セックス（数か月前）

排泄のための粘膜トンネルがギュッと窄んだ。
おちょぼ口のように脱肛し、肉穴から腸汁と浣腸液を滲ませる。
アンモニア臭の染み込んだ男子トイレの薄汚いタイルと、セピア色の可憐な肉孔器官の組み合わせは、なかなか無い。

紅い肉壁を中から露出させている直腸の粘膜。
無機質な壁に埋め込まれた小便器の前に、並ぶように据えた。
彩は、足を肩幅くらいに開き、中腰の内股でヒロシに尻を向ける。
既に３つのイチジク浣腸を肉壺のように飲み込んだ。

「じゃ～ほらここ」
ヒロシが指差したものは小便器だ。男子トイレにしかなく
3据くらい並んでいる。

「えっ……」
彩の顔色が蒼白した。
休日に学校の男子トイレに連れて来られ、イチジク浣腸
をさせられた上に、さらに何をしようというの？　という
少し恐怖に慄いた表情をしている。

「いいから座れよ、早く～」
躊躇する彩の腕を掴み、小便器の中に強引に彼女の身体を押し込んだ。
「ちょっ、わかったから……乱暴しないでよもう」
付き合い始めて数か月しか経ってない。しかし二人の関係は壊れつつある。

ガチャガチャ……。
ヒロシは制服ズボンのベルトを外し始めた。
休日とはいえ部活の連中とかもいるので流石に私服はマズい。トイレで彼女と浣腸プレイもかなりマズいのだが。

「ひいいいっ」
小便器の中にスッポリと収まるように腰をおろした彩。
何も履いてない尻に、何か冷たいモノが触ったようだ。おそらく尿だまりに置かれた目皿の膨れた部分だ。
むずむずと尻を動かしている。

確かに彩は華奢な身体をしている。小便器にすっぽりと入り、そのクネらす腰つきを見てると、彼女の肉便器としての素質を感じさせる。

「なかなか似合ってんじゃん」
ヒロシは皮肉ったような言い方をしたが、本当に合ってると思った。小便器に似合う女と言われて、うれしい女などいない。
だが、彩の雰囲気に漂う悲壮感というのだろうか、そういうオーラが彩を卑猥な奴隷女として引き立たせている。